

## 第3回（1月）会議録

### 報告 CSモデル校の取組について【中間報告】 寺井高等学校 「地域とともにある寺井高校の挑戦 ～つながる・つづける：地域を愛し、地域から愛される人材の育成～」

#### 1. 能美市コミュニティ・スクール（CS）から学ぶ

能美市では小学校 → 中学校 → 高校へと CS が広がり、学校と地域が共に子どもを育てる環境づくりが進んでいる。

#### 2. 寺井高校 学校運営協議会の活動目標

「学校と地域の懸け橋に」ふるさといしかわを愛する人材の育成  
⇒地域を愛し、地域から愛される人材の育成

#### 3. 寺井高校が目指すビジョン

- ・知性・人間性・体力の調和の育成
- ・地域と長く・深くつながる学校への転換（つながる・つづける）
- ・校長が掲げる4つの指標（主体的な進路実現、人間力の育成、安心・安全な学校生活、地域貢献の資質・能力の育成）

#### 4. 今年度の主な取組

##### ① 人間関係づくりと自己肯定感の向上

毎朝の挨拶指導を継続し、地域の方との接点を増やす  
→認められる経験が安心感・自己肯定感につながる

##### ② 「情報発信と交流」→ 生徒が積極的に外へ

「能美市との連携」→ 防災型コミュニティ・スクールの推進。地域の安全を共に守る。  
「キャリア教育の深化」→ 職場体験で地域企業と連携を強化

#### 5. 成果と課題

「成果」 9月ごろから挨拶が自発的にできる生徒が増加  
地域の方との交流から生徒の表情が明るく変化

「課題」 活発な生徒以外も 均等に地域と関われる機会を作る必要  
「社会に出て大丈夫」という社会へ出る自信の醸成が重要

#### 6. 今後の展望

小中高連携の強化→ 双方の自己肯定感向上につながる  
能美市との更なる連携→地域が高校生を認め、高校生が地域を愛する  
「地域で学ぶ、地域で育つ」学校づくりをさらに前進する  
生徒が「寺井高校でよかった」と心から思える学校へ  
学校・保護者・地域の三者連携を深める

報告 CSモデル校の取組について【中間報告】 鹿西高等学校  
「日本一 生徒が伸びる 鹿西高」の取り組み

1. 教育目標

郷土を愛し、地域で活躍しようとする人材の育成

2. 総合的な探究の時間（総探）の特徴

「志」を作り、協働して未来を拓く持続可能な社会の創り手の育成を目指して

- ① 強み
  - ・探究コンソーシアムや識者が関わるバックアップ体制の充実。
  - ・能登上布、どぶろく、中能登スローツーリズム協会など地域資源が豊富。
- ② 課題
  - ・地域連携が単年度で完結しやすく、継続性が弱い。
  - ・探究活動のアーカイブ不足。
  - ・鹿西高校ならではの“新規性”の創出が必要。
  - ・広報活動が不十分。

3. 学年別の探究テーマ

1年：地域課題の発見・自分事として

2年：体験の言語化・探究スキルの活用

3年：キャリア形成・社会の創り手としての意識を持つ

4. 取り組み事例

- ① 探究活動の発表・交流の充実
  - ・探究アドバイザー、学校運営協議会委員も加わり、生徒の探究の質が向上。
- ② アントレプレナーシップ（起業家教育）の推進
  - ・能登地区7高校が連携した探究学習を5月～3月の長期で実施。
- ③ 外部発表での成果
  - ・石川県立看護学校 高校生の探究発表会 「優良賞・奨励賞」
  - ・国連大学 次世代のリーダー養成プログラム「探究部門・第2位」
- ④ 探究が進路選択へ結実
  - ・探究活動を志願理由書や進路選択に反映

5. CSコーディネーターとしての課題

- ・学校の年間を通しての動きの把握、スケジュール調整
- ・CSコーディネーターがスムーズに動ける仕組みづくり

6. 今後の課題（総合的な探究の時間）

- ① 震災復興・防災、DX（デジタル活用）の視点をさらに取り入れること
- ② 地域課題を“自分ごと”として捉える姿勢の強化
- ③ 探究活動を単年度で終わらせず、継続的に取り組む体制づくり
- ④ 情報発信力の向上（地域・外部に向けた広報力の強化）

### (協議) 委員からの主な意見

- ・ 高校で挨拶を根付かせるのは難しい。先々地域との繋がりが深まっていけばいい。
- ・ C Sに賛成。地域参画、子どもの地域愛、教員負担軽減など多面的効果を認める。
- ・ 進学・就職どちらにとっても探究的学びは有効。主体性が推薦入試で重要。
- ・ 小・中・高と主体性を生む探究の連続性が必要。
- ・ 子どもの「やりたい」を引き出すことが重要
- ・ 祭り等の地元文化が地域回帰の動機になる。
- ・ 高校と大学の連携強化に期待。
- ・ 子どもの減少で高校は厳しい状況だが、地域と連携した魅力化作りが必要。
- ・ 小中高だけでなく、幼児期から主体性を育てる流れが必要。
- ・ 高校は様々な地域から生徒がくるから地域の捉え方が難点。
- ・ 挨拶は校長の姿勢等で学校ごとに差がある。
- ・ 地域の人が学校に関わる機会が増えると良い循環が生まれる。
- ・ C Sの継続には地域の人がキーになってくる。
- ・ 地域住民に「おらが町の学校」と思ってもらうことがC S成功に重要。
- ・ 町が鹿西高校を支えている点は素晴らしい。

### (香山 CSマイスターの講評)

1. 探究の重要性と入試での評価
  - ・ 総合的な探究の時間は、大学入試でも大きく評価される時代になっている。
  - ・ 主体性・意欲・深い学びが、「新しい学力」として重視されている。
2. コミュニティ・スクールが支える学力
  - ・ C Sは、「従来型（知識）」「新しい学力（主体性・探究）」の両方を高められる仕組み。
  - ・ 学校だけでは担いきれない学びを、地域の方が補完することで、生徒の力が伸びる。
3. 地域の大人による学習支援の可能性
  - ・ 地域の専門家が授業に参加する（例：押し寿司づくりなど）。
  - ・ 市町がオンラインで都市部の大学生を学習支援に招く仕組みも全国で広がっている。
4. コーディネーターの役割と増員の必要性
  - ・ 探究活動は一人のコーディネーターでは支援しきれない。
  - ・ 市町が国の制度（地域おこし協力隊など）を活用して複数配置することも有効。
5. 県立高校のコミュニティ・スクールの難しさと可能性
  - ・ 高校は通学範囲が広く、小中のように固定地域の見守りが難しい。  
その代わり、“ゆるやかな地域の支援ネットワーク”を作ることが重要。
6. 全国募集の流れと地域活性化
  - ・ 全国募集を行う学校が増えている。地域の関係人口が増え、地域活性化にもつながる。
7. 総合的な学習・探究の時間の充実が鍵
  - ・ 学校の力を最大化するには、探究の時間の質を高めることが最重要。
  - ・ 外部人材を活用し、教育課程の時間配分を増やすことも検討価値がある。
8. 子どもたちの興味を“本物の学び”につなげる仕組みづくり
  - ・ 探究での経験は、進路選択の熱意や大学での学びにも直結。
  - ・ 子どもの関心に火をつけてくれる大人との出会いを創ることがC Sの核。